

# 花ちゃん、オー君、モンタ博士のわくわくドキドキ冒険記4

国立市立国立第七小学校

平成29年1月13日 NO.81 (381)



カルガモ

オー君 「ねえ、花ちゃん。今年<sup>ことし</sup>は酉年<sup>とりとし</sup>だよ。それでというわけではないけど、この前<sup>まえ</sup>、ちょっと変わったカルガモ<sup>か</sup>を見<sup>み</sup>たんだ。口<sup>くち</sup>ばしが<sup>ない</sup>ないんだ。」

花ちゃん 「口<sup>くち</sup>ばしが<sup>ない</sup>ない・・・？そうじゃなくて、口<sup>くち</sup>ばしを<sup>かく</sup>しているみたいだよ。」

オー君 「そうか！このカモは、口<sup>くち</sup>ばしを<sup>せなか</sup>の<sup>うも</sup>う<sup>なか</sup>の中<sup>なか</sup>につ<sup>つ</sup>こんでいるのか。」

花ちゃん 「そうね、どうしてそんなことをするのかな。わ<sup>わ</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>ないね。不<sup>ふ</sup>思<sup>し</sup>議<sup>ぎ</sup>だね。」

オー君 「そうだ！モンタ博士<sup>き</sup>に聞<sup>き</sup>いてみよう！」

花ちゃん 「モンタ博士！カモが背<sup>せなか</sup>中<sup>なか</sup>に口<sup>くち</sup>ばしを<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>て<sup>い</sup>るけど、それはどうしてなの。」

モンタ博士 「ほほー。それは、いいものを見<sup>み</sup>ることができてよかったね。どうしてか、答<sup>こたえ</sup>を聞<sup>き</sup>いてしま<sup>ま</sup>う前<sup>まえ</sup>に、ち<sup>ち</sup>よ<sup>よ</sup>っ<sup>つ</sup>と考<sup>かん</sup>え<sup>え</sup>てみようよ。今<sup>いま</sup>の季<sup>き</sup>節<sup>せつ</sup>は冬<sup>ふゆ</sup>だね。冬<sup>ふゆ</sup>は寒<sup>さむ</sup>い<sup>い</sup>だ<sup>だ</sup>ら<sup>ら</sup>う。そ<sup>そ</sup>ん<sup>ん</sup>な<sup>な</sup>時<sup>とき</sup>、み<sup>み</sup>ん<sup>ん</sup>な<sup>な</sup>は<sup>は</sup>ど<sup>ど</sup>う<sup>う</sup>す<sup>す</sup>る<sup>る</sup>の？」

オー君 「手<sup>て</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>く<sup>く</sup>ろ<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>し<sup>し</sup>たり、マ<sup>マ</sup>フ<sup>フ</sup>ラ<sup>ラ</sup>ー<sup>ー</sup>を<sup>を</sup>す<sup>す</sup>る<sup>る</sup>よ。」

花ちゃん 「そうすれば、は<sup>は</sup>だ<sup>だ</sup>が<sup>が</sup>空<sup>くう</sup>気<sup>き</sup>に<sup>に</sup>ふ<sup>ふ</sup>れ<sup>れ</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>寒<sup>さむ</sup>く<sup>く</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>わ。」

モンタ博士 「そう<sup>そ</sup>う<sup>う</sup>だ<sup>だ</sup>ら<sup>ら</sup>う。鳥<sup>とり</sup>だ<sup>だ</sup>っ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>同<sup>おな</sup>じ<sup>じ</sup>な<sup>な</sup>の<sup>の</sup>さ。」

オー君 「そうか、口<sup>くち</sup>ばしを<sup>うも</sup>う<sup>なか</sup>の中<sup>なか</sup>に<sup>い</sup>れ<sup>れ</sup>ば<sup>ば</sup>寒<sup>さむ</sup>く<sup>く</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>の<sup>の</sup>か。」

花ちゃん 「そうね、寒い時は少しでも体温がうばわれないようにしているのね。」

モンタ博士 「フクロウの仲間などは、足の先まで羽毛におおわれているものもいるそうなんだ。寒さを防ぐためにいろいろな方法があるんだね。ところで、ツルなどが片足で立っているのを見たことがあるかな。」

オー君 「うん。そういうの見たことある。この前もアオサギが片足で立っていたよ。」



花ちゃん 「それも寒さと関係があるのかしら。」

オー君 「そうか、わかった。足を2本出しているよりも、1本の方が熱をうばわれないということなんだ。だから、1本で立っているんだ。」

花ちゃん 「なーるほど。足を2本いっしょにかくすことはできないわね。そうか、1本ずつ交代でおなかの羽毛であたためているというわけね。」

モンタ博士 「そのとおりだね。鳥のいろいろな生活の様子を見ていくと、それなりの理由とわけがよくわかって楽しいね。」

## さらに驚きの足の秘密・・・

さらに鳥の足には驚きの秘密がある。それは、足のつけね部分の血管の仕組みである。血管には動脈と静脈があるが、動脈のまわりを静脈が網の目のようにとりまいているということである。これを鳥の足の網目状血管という。足の先に送られる熱い動脈血は、その熱を網状の静脈血に移して冷たくなって足の先に送られる。足の先から冷えて戻った静脈血は、動脈血に温められ、熱い血液となって、もとに戻るのである。ここで見事な熱交換がなされる仕組みができていのである。熱い血液のために、氷に穴が開いたり、冷たい血液で全身が冷えきってしまうことはないそうである。